【入　選】

水が教えてくれること

仙台市立郡山中学校
三年　大橋（おおはし）　詩織（しおり）里

「水」。水と言って皆が連想するのはたいてい、透明で美しく輝いている水だろう。「水」。水と言って皆が連想しないのはたいてい、茶色く濁り、車や家が流された輝きを失った水だろう。そんな輝きを失った水は、私達人間に恐怖と憎しみ、悲しみを与えるのだ。そしてそれは、心深くに傷を付け一生忘れることのないものになる。

二〇一一年三月十一日二時四十六分。東北地方は激しい揺れに襲われた。当時、名取市立閖上中学校に勤めていた私の母は、震災から十二年を迎えようとしている今も、あの時見た悲惨な光景と自然の恐怖、そして水の大切さについて時には涙に声を詰まらせながら私に事細かく教えてくれる。

私が母に、東日本大震災で一番怖かったことは何?と聞くと返ってくる言葉は「津波」だった。これは母だけの回答ではないと私は思う。車が流され、家が流され、「人」が流される。その現場を見た人全員が怖いと感じるのだ。この時母は、水への恐怖を覚えたという。この恐怖は安易に想像できることではないのだ。二つ目の質問として私が聞いたのは、ライフラインが全てストップしたあの時使うことができず、一番困ったものは何?だ。母は、「水」と答えた。激しい揺れに襲われた直後、母は家庭科室へ水をくみに行った。ガスも止まっていたので、アルコールランプでお湯を沸かし、暖を取ったり、赤ちゃんの粉ミルクを作った。そんな中最も大変だったのは、トイレだという。トイレの水ももちろん流れないので、移植ベラで排泄物を掬い捨てていたのだ。

東日本大震災の津波の恐怖とは比べ物にはならないが、私も一度、水に恐怖を覚えたことがある。それは、小学校四年生の時。夏のプール開放だった。私は、五人程度乗ることができる、スポンジに乗って遊んでいた。友達と話していた。その時、何かの拍子にそのスポンジが転覆してしまい私はその下敷きになってしまった。私がスポンジの下にいると知らずに、何人かの人がスポンジの上に乗ってしまったのだ。その状態で私は十秒程度息ができなくなってしまった。息ができず、水の中でもがいていたあの時を、私は忘れることができない。苦しくて、怖くて、重かった。だが、私が経験したのはたった二十五メートルのプールにすぎないのだ。そんなプールでも私に恐怖を与えた。だから、津波はそれ以上の恐怖を人々に与えた。これは後に母から聞いた話だが、母はあの津波を見た時、あぁもう死んでしまうのだなと感じたそうだ。人間に死を覚悟させてしまうほどの水は、とても脅威的なのだ。

だが、「水」は私達人間の生活に必要不可欠だ。母から聞いた話のように、水がなければトイレも流れない、料理もできない。たったそれだけの話のようにも感じるが、水が無いだけで私達人間の生活が脅かされてしまう。

だから私達は、「水」とうまく付き合っていく必要がある。地球上には、たくさんの水がある。だが世界中で水が貴重だと言われる理由。それは、私達が利用することができる水が、地球上の全体の、〇・〇一パーセントと、極僅かだということだ。

「水」には恐ろしい一面もあるということを頭の片隅に置きながら、生活していく必要があると思う。また、「水」という限りある資源と付き合う、私達への大きな責任を一人一人が感じながら、日々生活していかなければならないのだと私は思う。